

駒場苑

機械浴ゼロへの改革の歴史

この記事の内容を10月3日のアクティブ福祉という
研究発表大会で発表します！



入浴委員
宮艸一裕



入浴委員
山木謙太郎

改修前の問題点

特養のお風呂というと、大浴場形式の一般浴・椅子が上下して湯船に入る形式のリフト浴・ストレッチャーに寝た状態に入る機械浴の3種類が一般的です。

駒場苑でも平成元年の開設時に、一般浴槽とリフト浴1台、機械浴槽2台を設置しました。開設当初は一般浴の利用者が多数を占めていましたが、個浴導入直前は50名中一般浴がわずか3名。リフト浴が19名、機械浴が28名でした。

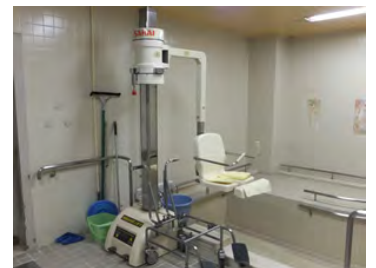
入浴は午後の3時間のみ。一般浴とリフト浴は同時進行で、一日に20数名が入浴されていました。

職員は時間に追われながら介助せざるを得ず、心理的・身体的負担の原因になっていました。リフト浴が1台しかないために、ゆっくり入浴は出来ず、衣服を脱いだまま待たされることもよくあり、リフト浴が混むという理由から、座位が取れるにもかかわらず機械浴に入らざるを得ないご利用者もいました。

ストレッチャーの老朽化も激しく、事故の危険も高くなりつつありました。



大浴場



リフト浴



機械浴

それではイカン！お風呂を変えよう！

当施設では、ご利用者に今までの生活習慣を尊重しその人らしい当たり前の生活を送っていただくことを目指しています。入浴も、一般家庭のような普通の浴槽（個浴）で時間を気にせずゆっくり楽しんで頂きたい、ヒノキの香りに包まれて温泉気分を味わってほしい、機械浴やリフト浴をご利用の方にも湯船に浸かる気持ちよさを感じてほしいという思いから、平成23年度から浴室の大改修工事を行うことになりました。

それは同時に、“機械浴から個浴への移行・機械浴ゼロへの挑戦のスタート”となりました。

取り組み開始！

平成23年5月 大浴場とリフト浴の改修工事
大浴場の湯船を埋めて、一人用のヒノキの浴槽を3つ設置

◎ 職員への技術指導

工事中の入浴は、先行導入されていたデイサービスの個浴浴槽を使用して行いました。その間に入浴には必ず主任が付き添い、実践の中で職員への技術指導を行いました。机上で議論を交わすよりも、実際にやってみる！やってみてから考える！これが一番の研修であることを実感しました。そのおかげで職員も不安なく個浴の移行ができたと思います。



ヒノキの個浴

◎ 個浴運用開始

午前中のみだった入浴を午前、午後とも行うことに変更しました。フロア毎に一つの浴槽を使用し、一日に入る人数も、フロアごとに午前2名、午後4名とし、職員がマンツーマン体制で介助することによりバタバタした入浴をなくしました。それにともない勤務シフトの変更も行いました。個浴が難しい方については、主任・リーダー・入浴委員を中心に、ご利用者お一人おひとりに適した椅子や用具を用いての入浴方法を検討し、職員への周知、習熟を図りました。

平成25年5月 機械浴撤去工事

老朽化していた機械浴槽2台を撤去し、ヒノキの三人浴槽を設置



ヒノキの二、三人浴槽
と洗身台



◎ 機械浴から個浴への移行開始

機械浴槽をすべて撤去し、それまで機械浴を利用していた方のためには、二、三人が入れる大きさのヒノキの浴槽を設置しました。(以下中型浴槽という)

中型浴槽の横には、浴槽のへりと同じ高さのヒノキの洗身台を設置し、寝ながらでないと洗身できないご利用者も安全に、またご本人も安心して入浴できるように工夫しました。

導入後一週間は前回同様主任が付き添い、技術の習熟、不安の解消にあたりました。職員も2年前から個浴介助をしていたので、全員が基本技術マスターしており、スムーズに行うことが出来ました。

また、施設全体が「機械浴ゼロ」の目標を共有しており、入浴介助補助のために新たに人員配置をするなど、組織全体として取り組みが行われたことも順調な移行が出来た理由のひとつでした。



車椅子から二人介助で洗い台へ移動



洗い台の上で体を洗う



二人介助で浴槽側へ移動



スライドするように浴槽へ



脇に手を入れて支える



浮力を利用して体を浮かす



洗い台に移動して体を拭く

機械浴ゼロを達成して

取り組みを続けた結果、ご利用者全員個浴への移行ができました。

当初、中型浴槽は体がプカプカ浮かんでしまうのではないかと予想していましたが、実際に行なってみると全員しっかり座って入浴することができ、これは新たな発見でした。

ご利用者からは、「いいお湯ね」「気持ちがいいわ〜」「もうちょっと入っていい？」という声が聞こえるようになりました。さらに、今まで介助が必要だったご利用者に、ご自分で洗身したり浴槽に入ったりするなどの嬉しい変化が見られました。

一人でゆっくり湯船につかるという、当たり前の入浴ができるようになったことで、ご利用者の ADL の向上、満足度と笑顔の増加を実現することができました。

このような取り組みを行なっている施設は介護業界全体ではまだ一握りです。

私達がこの取り組みを積極的に発信することで、介護業界全体の入浴ケアの質の向上に繋がることを願っています！

職員全体で目標を共有し、安全・安心な介助方法を考え実践することで

「機械浴ゼロ」は達成できます！

是非、他施設の職員の皆さんも「当たり前の生活」を目指して見ませんか！

